町民文芸

只見短歌会　令和六年五月詠草

亡き母に似て来しと思ふ丸き背よ我は母より永らへて居り　馬場　八智

老二人ちぐはぐなりし語らひも聞き返すこと多くなりたり　目黒　富子

奥山の残雪眺む五月晴れ夏日もありて衣類迷ひし　関谷登美子

水族館手を振るやうに泳ぎ去るエイに「ばいばい」と息子は応へをり　立花　奏音

朝からの仕事終へると老い猫はしわがれ声で近寄りて来る　新国由紀子

山の木に若芽萌え出づその間より山桜の花緑に映ゆる　渡部ヨリ子

只見俳句会　五月定例会

日高俊平太　指導

初物の苦き香の蕗の薹　味代子

春風に旅心のボブカット　一恵

寝観音望みて日永蕨染む　一穂

藤桐のひそり彩どる只見線　修一

鶴ヶ城織りなす松と桜かな　真理子

桜桜歩き疲れて芝に座す　信

葉桜やどこまで続く丘の上　睦子

いも植える家族そろって楽しげに　都

旧友と再会の笑み春うらら　紺青

春の昼居場所忘れるランチあと　恒夫

土を踏む土やわらかしあたたかく　礼

黒文字の木屑の火勢春囲炉裏

会場は春爛漫のコンサート

春嵐子供は走る頬そめて

土に陽の温み鋤き込むコマメかな

かつてこの峠にいくさ蝉しぐれ